

# 論文の内容の要旨

論文題目 韓国語助動詞 *cita* の多義性—用法間の相互関係と意味拡張—

氏 名 円山 拓子

## 1. 問題提起と論文の概要

韓国語の *cita* は、動詞・形容詞等の用言に付く助動詞であり、状態変化・受身・自発・可能など多様な意味を表す多義語である。本研究は *cita* の多義性について、文法的側面と意味的側面の両方からアプローチし、その全体像を捉えることを目標とする。それとともに、*cita* の意味の広がりや語彙的・統語的・語用論的な条件と密接に連動していることを述べる。そして、最終的な目的は、文法的特徴と意味的特徴が相互に作用しながら、*cita* の多義性を成り立たせていることを論じる点にある。上記の目標のもと、本稿では次の4つの問題を提起する。

- ① *cita* にはどのような用法があるのか？
- ② *cita* の各用法はどのような文法的特徴と結びついているのか？
- ③ *cita* の用法間の相互関係はどのように位置づけられるのか？
- ④ *cita* はどのような意味拡張の経路を経て多義語になったのか？

先行研究を概観すると、①「*cita* の用法」については、研究者によってさまざまな意見が出されており、統一的な見解には至っていない状況である。②「各用法の文法的特徴」に関しては、先行用言の品詞と受身用法という2つの部分のみに研究が集中しており、*cita* の用法全体の文法的特徴を網羅的に捉える作業はほぼ手付かずの状態である。そして、③「用法間の相互関係」は、まだ部分的な記述にとどまっており、④「意味拡張の経路」については、これまで本格的

な考察の対象とはされてこなかった。したがって、cita の多様な用法について文法的側面と意味的側面の両側からアプローチし、全体像を把握する作業は課題として残されている状況にある。

## 2. cita の用法

問題提起①「cita にはどのような用法があるのか？」に関しては、先行研究の掲げる用法を整理・検討することを通じて、用法設定の妥当性を論じた。まず、先行研究でも指摘されている状態変化・受身・自発・可能の4つを用法として設定する。すると、cita にはこれら4つの用法のいずれにも該当しない用例が見られる。それらの用例は「動作主を概念化の枠組みからはずして、事態の終結局面を重点的に表す」という意味的な特徴を共通して持つことから、「事態実現用法」としてまとめ、cita の第5の用法として提案した。

上記の5つの用法に基づいてコーパスを分析すると、状態変化用法の例が最も多く、全体の4割を占める。その次に受身用法、事態実現用法の順で頻度が高かった。自発・可能の2つの用法は頻度が低く、数量的に見ると cita の周辺的な用法である。また、コーパス調査においては、「受身と事態実現」「自発と可能」のように、2つの用法にまたがる用例も多く見られた。

## 3. cita の文法的特徴

問題提起②「cita の各用法はどのような文法的特徴と結びついているか？」に関しては、先行用言の品詞、語彙アスペクト、構文的な特徴、名詞句の属性、話者の予想との一致／不一致という5つの項目を取り上げ、分析をおこなった。その結果、用法内で共通していて、バリエーションに制限がある項目、本稿で述べるどころの「不可欠な文法的特徴」が明らかになった。用法によって何を不可欠な文法的特徴とするかは異なる。また、先行用言の品詞のような単一の条件ではなく、語彙レベル・構文レベル・語用論レベルそれぞれに属する複数の文法的特徴が cita の用法に関与していることを指摘した。

## 4. cita の用法の相互関係

問題提起③「cita の用法間の相互関係はどのように位置づけられるか？」に関しては、まず、各用法の不可欠な文法的特徴に基づいたレイヤーモデルを提示した。レイヤーモデルは本稿が作業仮説として提案するもので、他動性と名詞句階層、文法的レベルという抽象度の高い3つの概念を軸として、それぞれの文法的特徴を表すレイヤーを複数重ねたモデルである。このモデルを用いることによって、cita の用法の解釈が決定していくプロセスが把握できる。さらに、2つの用法にまたがる例がどのように生まれるのかも説明できるという利点がある。このモデルから、「他動性×名詞句階層」「他動詞×文法的レベル」という2つの概念を平面軸とした2種類の意味地図を導き出した。これにより、cita の用法間の相互関係が図表上の位置関係として

把握できるようになる。この意味地図の文法的レベルに沿って見ると、cita の用法は「状態変化→事態実現→自発・受身→可能」の順で、局所的な文法的特徴が関与するものから、より包括的な文法的特徴が関与するものへと並ぶ。他動性の軸に沿って見ると、「状態変化→事態実現→可能→受身→自発」という順で、他動性の低いものから高いものへと配置されることが読み取れる。

## 5. cita の意味拡張

問題提起④「cita はどのような意味拡張の経路を経て多義語へと発展したのか？」に関しては、共時的な意味の分析を通じて論じた。cita のプロトタイプの意味は、本動詞の「落ちる」という下方向への空間移動である。そして、cita の多義全体に共通するスキーマの意味は「人・モノが背景的な力によって変化し、ある到達点に至る」というものであると仮定した。そして、「落ちる」を出発点として、助動詞の多様な意味に至るまでの意味拡張の経路を論じた。

本稿の特色は、本動詞から直接、助動詞が派生したと考えるのではなく、本動詞と助動詞の間に<動詞+cita>型の複合動詞が介在すると考える点にある。これによって、助動詞が<用言の連用形+cita>という構文をどのようにして獲得したのかを説明することができる。また、これまで cita の意味拡張に関しては言及されることのなかった複合動詞を説明に組み込むことが可能になる。先行研究においては、本動詞から助動詞への意味拡張は明確な説明がないまま、漠然と捉えられてきたが、複合動詞を介在させることによって、段階を踏んで派生していく具体的な経路を描くことができる。

この意味拡張の経路は、15世紀の段階での cita の用法とも整合性がある。また、レイヤーモデルから導き出した意味地図と比較すると、用法間の位置関係が共通している。さらに、用法ごとの数量的分布を重ね合わせると、プロトタイプの意味に近い用法（状態変化・事態実現・受身）ほど用例数が多く、意味拡張の中で多くの段階を経た用法（自発・可能）ほど用例数が少ないという傾向が見られた。

## 6. cita の言語学的位置づけ

以上の4つの問題提起に基づく議論を土台として、メタファーと文法化、ヴォイス体系の中で位置づけという3つの観点から本稿の分析を言語学的に捉えなおした。

メタファーに関しては、方向に関するメタファー、空間的概念から時間的概念へのメタファー的写像、広義のメトニミーという3つの点から検討した。

文法化に関しては、cita の意味拡張の経路を一方向性仮説と照らし合わせ、一般化と意味の漂白化、脱範疇化という3つの点で、本稿の主張する意味拡張の経路が、文法化の順序としても十分に妥当性があることを述べた。また、Traugott (1989)の述べる「主観化」が、cita につい

では部分的に当てはまらないことを述べ、cita を通じて、英語とはタイプの異なる主観化の過程を提示できる可能性があることを指摘した。

ヴォイスの体系の中での cita の位置づけに関しては、「出来文」「BECOME 型受動」「構文ネットワークの広がり」という3つの点から論じた。構文ネットワークの広がりという観点からは、これまで受身の機能領域と指摘されてきた3つの機能が、cita の用法ではどのように関わるかを論じた。cita において「状態化」は事態実現用法、「被動者の話題化」は受身用法、「動作主の非焦点化」は自発用法に卓立して表れている。さらに、機能領域の広がりとして、「コントロールの消失」から拡張して、モダリティ的な側面の強い可能用法が派生していることを主張した。

これらの議論からわかるように、cita は1つの形態でアスペクト・ヴォイス・モダリティにまたがる意味を表している。この3つの文法カテゴリーが連続性を示すところに cita の独自性・特殊性がある。

## 7. スキーマ的意味と文法的特徴の相互作用

cita の意味的特徴と文法的特徴に関する議論は、「スキーマ的意味と文法的特徴の相互作用」という形で統合することができる。言語運用においては、cita に共通するスキーマ的意味から、文法的特徴という手がかりを通じて個別の意味を引き出し、曖昧性を除去している。つまり、スキーマ的意味という抽象的・概念的なものと、文法的特徴という具体的・個別的なものが車の両輪となり、それぞれの側面から cita の多義性を支え、両方が連動することで多義語としての cita の意味機能を成り立たせている。それにより、記憶の負担に対する経済性とコミュニケーション上の確実性を確保しているのである。このように、cita の多義性はスキーマ的意味と文法的特徴がそれぞれ別の側面から働き、それらが相互作用することで成立していると主張した。